メインシナリオ／サイド第２回
『滅びを望む者たち　第２話』個別リアクション

『地下の住人』

　地下にて、アディーレ・ペンペロンは、ここに長く住んでいるという老人に、外の様子を話してあげた。
「……というわけで、和気藹々と鍋パーティーを楽しんだみたい」
　不安を煽ることのないよう、希望を持っていられるように数少ない明るい話題を中心に。
「わしも、いつかは表で美女に囲まれてパーティーを楽しみたいものじゃ」
「美女に囲まれるかどうかは分からないけど、パーティーなら参加すればいいんじゃない？　館の人に頼んでみようか」
「そういうわけにはいかんのじゃよ。ここから出た途端、暗殺されるかもしれんからのう」
　そう言って、老人は明るく笑った。
「……ねえ、お爺さん。何者なの？」
　アディーレは明るい女性の目から、鋭い騎士の目に変え、口元に僅かな笑みを浮かべながら老人に問う。
　この部屋は異質だった。何かの研究室のようであり――この老人は、まるで幽閉されているようであった。
「ここを建ててからずっと住んでると言っていたわよね。この建物の結界を張ったのもお爺さん？　どんな仕組みなのかしら」
「結界を張ったのは、アゼム君じゃよ。今は孫の小僧が維持しているようじゃが。わしに出来るのは、こういった魔法装置や魔法薬を開発することくらいじゃ」
「この館は大きな魔法装置なのね。こういう結界ってどこにでも張れるものなの？」
「魔法鉱石を始めとする材料と開発できる者、そして特異な術者がおればな」
「そうかぁ……」
　開発できそうな人物はここにいる。術者は少なくてもレイザ・インダーには出来そうだ。
「だけど、魔法鉱石は余分にないのよね」
　アディーレはふうとため息をついた。
　色々な場所に張れるのなら、警備の強化にもつながるのに。
　……と、その時。
　天井から荒々しい物音が響いてきた。
　怒鳴り声、叫び声……争いの音だ。
　戻らなければ！
　武器を手に、アディーレは階段に向かう。
「待つんじゃ！　ここに立てこまれたら……」
「わかってるわ」
　アディーレは地上階への扉の前で、待機する。
　魔法が使えるこの場所に、囚人を通すわけにはいかない――。

　喧騒が治まり、アディーレが地上階へ飛び出た時。
　館の周りは風と炎が渦巻いていた。
　後に、囚人は全て正面玄関から脱走したと聞かされた。

こちらのリアクションは以下の人物に発行されています。
アディーレ・ペンペロン